

《課程博士論文要旨》

日韓における国家形成期の墳丘墓研究

李 澤 求*

はじめに

国家形成期の墳墓は、地域や時代により多様な姿をみせている。日本では方形周溝墓の出現後、弥生時代後期に墳丘墓が現れることに注目し、近藤義郎・都出比呂志氏などが墳丘墓に対する概念を成立させた。韓国は近年、調査と研究結果が増え、様々な研究が行われている。

本論文では、墳丘墓の築造方法と台状部の平面形態、主埋葬施設及び追加埋葬施設の形式、副葬遺物の様子などによる首長墓の時期的・地域的・国家的な変化相を比較研究した。まず、日韓国家形成期に造られた首長墓に対する定義を行い、日韓首長墓がどのような共通点と類似点、そして相違点をもっているのか、形態を分類し分析を行った。ただし、本研究は日韓墳丘墓の類似性や系統性などを探るため、要因を細く分類するよりは、大別して両国の類似性・系統性などを検討した。

日韓に存在する国家形成期の首長墓には、盛土系と貼石系に大別できる。盛土系には区画墓としての墳丘墓、周溝墓（方形と円形）、方形台状墓、周溝土壙墓などが、貼石系には四隅突出型墳丘墓と方形貼石墓がある。各研究者の意見をまとめると墳丘墓は方形の築造企画をもち盛土部（或いは削り出しによる台状部）を造り、盛土部に埋葬施設を施し、徐々に巨大化する墓である。現在、大半の墳丘墓は海の沿岸部、または川沿いの丘陵（一部は微低地）から発見されている。

今回研究対象になった遺跡と遺構は、日本の場合、九州の佐賀・福岡・長崎・熊本・大分・宮崎県の総107ヶ所394基、中国は山口・島根・鳥取・広島・岡山県の120ヶ所507基、近畿は兵庫・京都府51ヶ所433基が、韓国は京畿道・忠南・全北の45ヶ所446基と忠清内陸の17ヶ所258基の周溝土壙墓である。

墳丘と埋葬施設の分析

墳丘墓の台状部形態を反映・参考し、盛土系（総1619基の中、日本940基、韓国679基）はⅠからⅣ形式、貼石系（総117基）はⅠからⅢ形式に平面分類し、築造方式は台状部の築造方式をAからE形の5つの類型に分類した。墳丘墓の拡張には、墳丘内と墳丘外があり、墳丘内拡張は前述の築造方式D形とE形が属する。墳丘外拡張は、平面からみえる相互関係で確認でき、接続と従属拡張がある。墳丘盛土方法には、西日本では土手状盛土の‘西日本的工法’を採用し、韓国でも事例は少ないが同じく土手状で盛土したことが分かる。墳丘墓は伝統性と保守性を呈しながら一貫して築造され、5基から100基まで、群集になり平地と丘陵頂上部・斜面部に分布、立地する特徴がある。

平成25年度 *文学研究科文化財史料学専攻博士後期課程

日韓の地域、平面形態、築造方式、立地などを土台に計量分析を行った。まず、長・短辺の両辺が計測できた1038基の遺構を対象に国別、種類別に分け、分析を行った。韓国320基の遺構は、ほとんど(91.9%)の墳丘墓は1.00~1.60:1の長短比で、その他一部(6.2%、1.9%)が長方形と細長方形で造られたのが確認できた。周溝土壙墓の65基は平均6.85mで、長短比ではほとんどのが1.99:1内に分布している。

九州・中国・近畿から検出した墳墓の総940基の中、580基を分析すると1.5~20mの間に等しく分布する単峰分布を見せている。そこで、九州の243基、中国の178基、近畿の159基を地域に分けて分析した。九州と近畿では大体20m内外の長軸をもち1.00~2.00:1の間で築造されるが、中国は長軸17.6m、長短比1.53:1を基準に墳丘の規模を分け築造したのが分かる。日本の貼石系、総117基を分析した結果、25m以内の基本形と25m以上の大型形に大別される。

立地から見ると日本では最初、微低地にⅠ・Ⅱ・Ⅲ形式の墳丘墓が造られるが、すぐ丘陵に移動し造られ、徐々に斜面部にも築造される。貼石系は最初から丘陵頂上部と斜面部を利用し墳丘を築造した。韓国ではⅠ形式が先行時期に丘陵頂上の平坦面に造られ、以降Ⅱ形式が隣接して頂上部に、Ⅲ・Ⅳ形式は斜面部を中心に造られる。平面形態と築造方式を見ると、日本盛土系はA形の頻度が全体的に非常に高い。BとC形にはⅡ・Ⅲ形式が多いが、C形にはⅠ形式が極めて少ない。さらに、水平拡張形のD・E形にはⅡ形式の比率が高い。

規模の面では、日本盛土系は長軸20mまで、1.5:1の長短比をもち定型化され、貼石系は40mまで至る長さをもつ墳墓も造られる。韓国の盛土系は、墓を築造するための区画を造る時、ほぼ一定な長短類型に基づき規模や形態を考慮し築造したと判断される。

立地に対する築造方式の分布特性を見ると、平地に小規模で単独葬の墳墓が造られた後、丘陵頂上部に移動し、徐々に斜面部にも造るようになる。墳丘外拡張は日本では各地から107基が確認、その中、連接拡張は58基、従属拡張49基である。韓国は、忠南と全北を中心に発見される。拡張する理由は権力集団の結束・紐帯関係を示すためだったと考えられる。

日韓の埋葬施設の中、木棺、石棺、石蓋土壙に対し、主埋葬施設と追加埋葬施設に分け、規模に対する分析を行った。まず、日本の249基の主埋葬木棺を分析すると、長軸375cmを基準に、長短比8.35:1を基準に分けられ、最大480cmまで大きくなり、長短比も非常に細長くなることが分かる。韓国の主埋葬木棺は最大386cmに留まるが、約230cmと約287cmを基準にグループ化される。また、長短比では5.5:1程度で細長くなる。日本の210基、追加埋葬木棺は、長軸290cmで二つのグループに分けられるが、長短比ではほぼ等しく分布している。韓国の総65基は237cmと312cm、長短比は2.63と3.66:1で三つに分けられる。

日本の墳丘墓では、主埋葬と追加埋葬において、木棺長軸で約40cm位の差があり、韓国墳丘墓も長軸で約15cm位の差があることが分かる。主と追加埋葬木棺に長軸差があるのは、埋葬をする時、明確な意識をもち、主埋葬より小さい規模の木棺を安置し、地位の格差または従属関係を表したと考えられる。

日本の木棺全体を地域別に平均比較すると、中国の木棺が少し大きく、九州と近畿の木棺平均がほぼ似ている。また、九州では主と追加埋葬の木棺には、克明な規模の差があることが分かる。

中国でも主及び追加埋葬施設の木棺には、規模にある程度の差がある。特に主埋葬木棺には、最大480cmに至る長軸をもった木棺が使用されている。近畿でも主及び追加埋葬木棺は、長軸平均約40cmの差がある。近畿も墳丘内の埋葬位置に関する意識があったと考えられる。韓国の場合、盛土系の主と追加には、平均約15cmの差が見える。また、周溝土壙墓は、平均的にも盛土系とは差がある。

また、日韓の主埋葬木棺長軸の比較を行った。日本の主木棺は地域によって少々の差はあるが、特記する程ではない。ただ、韓国の盛土系木棺規模が他と比べ、大きいことが見える。すなわち、日本列島と韓半島の墳丘墓集団はそれぞれ異なる制作意図をもち、木棺を造り、墳丘中央に安置したと考えられる。

最後に、日本の石棺140基の分析を行った。81基の主埋葬石棺は長軸113cmと225cmを基準に、長短比3.2と5.58：1を基準に三つのグループ化ができる。石棺の場合、木棺より規模の細分化が進んでいたと考えられる。次は追加埋葬石棺は86cmと141cm、長短比2.77と4.75：1を基準に三つのグループ化が見える。また、主及び追加埋葬石棺の平均比較をすると、両者の間で約20cmの平均差がある。

国家形成期の墳丘墓から発見される遺物の場合、国・地域的に非常に多様な様子を見せているため相互分析するのは困難である。ただ、土器の大きな流れとしては、弥生時代には土師器系（韓国は軟質系）土器が、古墳時代に移ると須恵器系（韓国は硬質系）土器に変化する。

終わりに

西日本と西韓国から発見される墳丘墓は日韓ともに方形をしており、台状部の規模、平面形態、分布様相、A～E形の築造方式、墳丘の盛土方法、埋葬施設などから地域差による少しの差はあるが、強い関連性を見せている。その様子を段階別に分けてみると、次のようである。

I 段階（～紀元前後）

日本の弥生前期中期に当たる時期で、この段階では日本海側を中心とした平地、または丘陵頂上に墳丘墓が造成される。平面形態はIとII形式が主で、一部ではIII形式も見え、貼石系墳墓はH-II形式が主に造られる。築造方式ではA形とB形が中心である。韓国では西海岸を中心に盛土系墳丘墓が形成される時期で、墓は主に丘陵頂上部から発見される。平面形態は小規模のI形式とII形式が発見される。また重複現象は見られず、墳丘は単独に造成される特徴が見える。

II 段階（紀元前後～3世紀前半）

この時期は、弥生後期と終末期に属し、墳丘墓は尾根上を中心に分布する。特に貼石系の場合、四隅突出型のH-I形式が、丘陵頂上部を中心として造られる。韓国では、眉毛形をしたIII形式の周溝土壙墓が登場し、盛土系は全て丘陵の頂上部に移され造成される。埋葬施設はI段階と同じく木棺と石棺が利用されるが、主埋葬施設には木棺が使用される例が増える。II段階の墳丘墓は3世紀頃から多葬伝統をもつ大型墳丘墓になる。この時期以降、韓国では梯形のIV形式が全北地方を中心に徐々に登場する。

III 段階（3世紀中後半～4世紀前半）

III段階は、日本の古墳時代前期に相当する。墳丘墓は丘陵に集中的に造成される特徴が現れる。

埋葬施設は、ほぼ木棺が中心で追加埋葬に石棺が安置される傾向がある。また、この段階から盛土系墳丘墓の形式に変化が現れるが、築造方式C形の形態が発展する。また、この段階に日本では中国と九州地域を中心に盛土系が造成される。韓国は墳丘墓の数が急激に増加するが、Ⅱ段階から築造された周溝土壙墓は、この段階で消滅する。

Ⅳ段階 (4世紀後半～5世紀)

日本の古墳時代中期に属する時期である。Ⅳ段階になると墳丘墓は日韓ともに数が急激に減少する。日本では、墳丘墓はもう首長墓の機能を失い、前方後円墳の周囲に陪葬される墓として変化すると考えられる。韓国では、忠南西海岸の一部と全北南部の一部を除くと、大部分の地域から消滅する。平面形態においては、日本ではⅢ形式が、韓国ではⅣ形式が主流になり、築造方式C・D・Eの比重が高くなる様相が見える。